
彼女の外と僕の中

勝岡正太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の外と僕の中

【Nコード】

N6293Q

【作者名】

勝岡正太郎

【あらすじ】

彼女は汚れているのかもしれない。けれど、だったら、きっと僕だって汚れているんだ……。『僕』と『中尉』が織りなす、まるで白昼夢のようなストーリー！。

雷鳴

十

呼吸のタイミングに乗せて、セミオートでトリガーを引いた。乾いた破裂音が響く。弾丸は、目算二十メートル先の標的の頭部に吸い込まれていった。それは、とても綺麗な軌跡だった。

命を奪うための、綺麗な軌跡だ。

僕はその間後ろに立つ中尉の、眼帯の奥、光を失った左目の色を想像した。

一瞬だ。

一瞬だけ、綺麗な灰色の瞳の幻覚が見えた。

弾丸が標的を貫く。

標的は、音もなく倒れた。いや、彼が倒れ、雑草がざわつく音だけは聞こえた。それだけだ。ただ、それだけ。

標的は死んだ。

何の変哲のない。

それは、ありふれた命だった。

僕も同じものを持っている。全く、同じものを。

兵士という存在は、集団であるからこそその脅威であり、個として見れば造作もない。人の子だ。きっと、彼と逆の立場だったら、命を奪われていたのは僕の方だろう。

「これで三人」僕は細く息を吐く。

怖くなかった、と言えば嘘になる。「良い子だ……」そう呟いて、愛棒のボディを撫でた。

このアサルトライフルは、使用者に比較的素直に応えてくれるモデルだ。一番のセールスポイントは、何と言っても、引き金とシア

ーが上手く兼ね合っているところ。それが大きい。おかげで命中精度は高くなり、殺傷能力が安定している。けれど、決して新式ではなかった。二年程前の型だ。トリガー部にこびり付いた小さな錆は、いくら磨いても取れない。

先々月実装された新しいライフルは高威力で、飛躍的な火力を有しているのだが、非常に重量があり、何よりぶれた。だから僕は旧式のライフルに拘っている。それは、僕に腕力が不足している、という証拠でもある。

「銃の性能の差じゃないんだ。敵を照準に合わせるまでの時間が格段に短い。やっぱり、君には腕がある」

格段、と言うのは、他の訓練兵達と比べてということだろう。中尉自身と比べて、という意味合いは皆無だ。

「中尉にだって腕があるじゃないですか。ちゃんと二本」

僕は愛棒のライフル下ろしながら振り返り、一メートル程後ろの中尉に言った。彼女は悠長に煙草を吸っていた。つまり、射撃をしている僕を、彼女はじっくりと観察していたということだ。

「あまり上官を見下すな」中尉は目を細めて苦笑し、煙草を、落葉と枯枝に塗れ、すっかり湿った地面に落した。「君の才能は本物だ」

僕は中尉を褒めたつもりで言ったのだ。けれど、中尉にはそれが正確に伝わらなかったらしい。

「ありがとうございます」

僕は額に張り付いた前髪を払い、口元を傾ける。

中尉は、僕よりも少し髪が長い。規則違反ぎりぎりだ。もし横髪が耳まで到達すれば、例えユウリであろうと、罰則を食らうだろう。一方、人命に関わる規則ならば、いつだって曖昧に処理され、いつだって何事もなかったように見過ごされる。けれど、こういった慣習に関する規則には細々と厳しい。絶対に見過ごさない。軍とは、常にそういう場所だ。

その頭髪を撫でつけながら、中尉は「今日はそろそろ切り上げよ

う」と言い、駐屯地の方角を差した。

すぐ近くに停めたジープまで、二人で歩いた。勿論、僕は中尉の後ろに付いて歩いた。

「自分の実戦配備はあるでしょうか？」

泥塗れのジープに乗り込みながら僕は訊いた。訓練では、訓練兵が先に車両に乗り込む決まりだ。

「どうだろう。本土は既に終戦ムードらしいから……。本土から昨日送られてきた新聞の、『我が軍圧倒的勝利』という見出しの記事を、昨日、木戸川中尉が皆に見せていたよ。私は見なかったけれど」僕の後に続いてシートに腰を下ろすと、中尉は僅かに口元を下げた。エンジンをかけ、アクセルを踏み出す彼女の横顔はどこか曇っていた。

「この地域に、価値はまだ残っているのでしょうか。中尉はどうお考えですか？」

これ以上この地区を制圧することで、自国に何か大きなメリットはあるのかという問いだ。

「全く。とつくの昔から、税金の無駄遣いだよ」中尉は上唇を舐める。「ただ、次の戦争の準備には打って付けかもしれない。例えば、君のような有能な歩兵の育成、とか」

「中尉も、終戦の後、大きく出世するのでしょうか？」

「あまり中尉中尉と連呼しないで。私は、あくまで、小さな歩兵隊の小隊長を務めているだけ。中尉相等官という肩書は……、ご機嫌取りだよ。上からの。実際、そこまで大した権限は与えられていない」

中尉は片手で煙草を取り出し、火を点けた。それを見て、僕は黙ってレギュレータハンドルを回して窓を開ける。煙草の煙を嫌っている訳ではない。ただ、彼女の隣に座る上で、最低限のマナーだと思うのだ。

「君の方こそ、良い役に付けるだろうな」

中尉は白い煙を吐き出した。

「周りからも、そう言われ続けていますが……、中尉の……、三間坂隊長の出世とは訳が違いますよ」

僕は窄まった口調になっていた。両目が勝手に、中尉の眼帯を見つめている。

正直、自分自身の展望については、あまり興味がなかった。配属先が後方支援でさえなければ、どうなったって良い。

「歩瀬、君は素直に上を見上げていれば良いんだ。私ばかり見ていたら、早死にをすることになる。兵士としてではなくて、人として」呆れたような口付きで中尉は言う。「それに、汚れてしまう」

「三間坂隊長の元で死ぬるなら、何でも構いません」

窓から空を覗いてみても、灰色の空しか見えなかった。僕の上にはいつも雲が浮かんでいる。青天というものを見た記憶がない。

「馬鹿を言うな」

中尉は口元を綻ばせた。頬に笑窪が出来ている。久しぶりに彼女の笑顔を見た気がする。

ジープのフロントガラスに水滴が落ち始めた。スコールかもしれない。地面が水分でぬかるんでも、このジープの馬力なら問題ない。ただ、中尉が運転するときは平凡なアスファルトでさえスリップが多い。こう雨天になると、要らない心配で、つい緊張してしまう。

中尉は陸上戦、特に白兵戦においてプロフェッショナルと称され、多角から英雄視されている。しかしその一方で、車両の扱いは人並み以下という短所も備えていた。

前に、運転を代わってもらおうとしたが、彼女は眉をしかめてそれを拒否した。語気も荒かったように覚えている。だから、僕はそれ以来、口が裂けても運転を代行すると提案はしていない。

途中で、他の地点の組みを拾った。彼らは、ナイスタイミングだ、と口を揃えて言って、苦笑いを浮かべていた。皆、中尉が運転していることについては珍しくノーコメントだった。些末な問題よりも、早く帰りたいのだろう。いや、早く帰りたいから、些末な問題になったとも言える。

十キロ程の道程だったが、雨が強くなる前に駐屯地に到着した。土木部の有能さをしみじみ体感する。彼らは、ジャングルと呼んでも可笑しくないような林地にすら、それなりの舗道を敷くのだ。まさに影の労働者と言えるだろう。彼らのおかげで、僕達は比較的快適に、駐屯地と実戦地の合間を行き来することが出来るという訳だ。ジープを駐車させると、雨が突然大降りになった。

「雨が強くなってきたな」中尉が一人言のように呟く。

僕たちは傘を持ってきていない。兵舎までの数十メートルを、ずぶ濡れになりながら歩かなければならなくなった。僕は少し億劫になって、溜息を吐く。昔から、雨はあまり好きじゃない。

「これだから南の諸島部は面倒臭い」中尉が言った。

「そうですね。空のゲリラが一番厄介だ」

言いながら、軽やかな動作でジープの外へ飛び出した中尉に、僕は続いた。地面に、ブーツの裏が沈んだ。かなりぬかるんでいる。気を抜けば、滑って転びそうだった。

「早く熱いシャワーを浴びたい気分」中尉が呟いた。

「自分は喉が渴きました」

大きな雨の粒が僕の頬を叩く。

ふと下を見ると、地面がクレーターだらけになっていた。これが全部、敵の爆撃機から落とされた爆弾の跡だったら。僕はそんなくだらないことを考えてみる。本当にくだらないことだ。

遠くで、大気まで震えそうな雷鳴があった。

温熱

十

「後二週間程で本国へ帰れるらしい。終戦だ」

インスタントのコーンスープをスプーンで啜りながら、同期で坊主頭の石畝^{イシグロ}が言った。

「まだ正式な伝令を受けていない。そんなの、ただの噂だろう」僕は熱いコーヒーで満たされたカップの側面を指で触れた。まだ飲める温度じゃない。舌を火傷すると、ストレスになる。

「確かに、最新の状況によれば、最前線は殆ど落ち着いたらしいが、徹底的に潰すためには、少なくとも後三週間は必要だろう」

石畝の隣に座る桃杷田^{モモエダ}が、口元を斜めにして言う。桃杷田は僕より一年先輩だ。しかし、そのことが、ここでは話題になることはあまりない。いや、僕の前では、と言った方が正しいのかもしれない。確か前に、「僕が驚くような経歴を持っている奴だけが、昔話を自慢してくれ」と、彼の前で言ったことがあるからだろう。決して、彼に対しての発言ではなかったけれど、もしかしたら、彼はそれを気にしているのかもしれない。

「お前達、大城戸隊長の新聞を見てないのか？」石畝は声を大きくして訊いた。

「マスメディアの報道を丸呑みにすることはない。彼らはどんな時だって一方的だ」僕は溜息を吐いた。

例えば、お気に入りのサッカークラブの敗戦ニュースが、謂れない酷評ばかりで埋め尽くされていることがある。相手チームの横暴なラフプレーなんかは、なかったことになっているのだ。

「士気の向上には、多少なりとも、役に立ってるんじゃないか？」

桃杷田は煙草を啜えた。彼は既に夕食を終えていた。「少なくとも何も報道しないよりは面白い」

「でも、桃杷田は見ないんだろう？」僕は訊いた。

「ああ、見ないさ」桃杷田は微笑んで、マッチで煙草に火を点けた。「お前達二人が、釣れない奴だってことは置いといてだな、終戦だよ。終戦」石畝はスプーンで皿を二回叩いた。

「だったら、なんだって言うんだ」桃杷田は片眉を曲げる。「戦争が終わっても、生き残っている俺達は、兵隊のままだろ」

確かにその通りだ。僕も桃杷田に同意して頷いた。

「そんなこと分かってるさ。当たり前だろう。俺が言いたいのは、そんなことじゃなくて、俺達の将来のことさ」石畝はスプーンを置いた。「どこへ配属されるか、それが問題だ」

「石畝、お前だけはここで留まってイーリア人のおもりだ」

急に後ろから声があった。目の前の二人は目を丸くさせる。僕はカップに伸ばそうとしていた右手を停止させ、振り返った。すぐ後ろで、中尉がズボンのポケットに両手をつっ込んで立っていた。上はタイトな黒いTシャツを着ている。僕達と殆ど同じ格好だった。

「……、隊長、お疲れ様です」

石畝は言いながら立ち上がった。桃杷田もそれに倣って立ち上がるようにする。けれど中尉は、「構わない」とそれを制した。二人は困憊こんぱいしたように、萎びた息を吐く。

「で、将来がどうしたって？」中尉は僕の隣の椅子にゆっくりと腰を付けながら言う。

「いえ、石畝が勝手に舞い上がっているだけです」桃杷田はまだ一センチも灰になっていない煙草を、灰皿の中で揉み消した。「ひよっとしたら、思ってもないくらいの地位が与えられるかもしれない、と」

二人とも僕と同じ隊についている訓練兵だ。つまり、中尉の教え子でもあるということでもある。

「誰もそんなこと言っていないだろう」

石畝は腰を下ろしながら、慌てて否定する。

「実戦経験の乏しい、尻の青いガキの分際で……。そんなことがあるか。私だって、まだ、ままならないと言うのに」

中尉は目を軽く瞑って言った。

「いや、中尉は大出世するでしょう」石畝はスープを見つめつつ口を開く。「噂では……。司令部入り、だとか」

僕はカップを片手に、中尉の横顔を見た。彼女は石畝の顔も、スープの表面も、桃杷田の顔も、どこも見えていなかった。何もない宙を、ただじつと眺めているだけ。その力強い眼光を宿した右目は、一体何を見つめているというのだろう。

「……まさか。根も葉もない、本当に単なる噂だよ。何なら、大城戸中尉にでも尋ねてみると良い……」中尉は細い声で言う。

いくら太陽みたいな人格の大城戸中尉でも、そういう機密的な情報を経々口にするのではないだろう。つまり、教えてやらない、ということだ。

「お前達と与太話をするのも良いが、まず伝えることがあった」

中尉は深い瞬きをした。

「何ですか？」僕はコーヒーを吐息で冷ましながら訊いた。

「明日は休養日になる。それから、訓練は明後日で最終だ」

「急、ですね……」桃杷田が呟く。

「イーリアのゲリラ兵が全滅したからですか？」僕は訊いた。

「違ふよ、歩瀨。条約が結ばれたんだ。明々後日から、敵国領であるイーリアの人間を殺せば、例え我らが大国の軍人であろうと、誰であろうと、それは罪に問われることになる」

我らが大国——皮肉のこもった良い表現だ。

「相手が共和国の人間が扮したゲリラ兵でも？」石畝が訊いた。

「そう。共和国の人間が扮したゲリラ兵でも」

「明日が休養の理由は？」僕は空かさず訊いた。

「理由なんて必要？　上が休養日と言ったら、清々しい青天でも休養日になる。生憎、明日も大雨らしいけれど」

「そうでした……」

僕はコーヒーを口に流した。まだまだ熱い。けれど、無理をすれば飲めないことはない。苦みは丁度良かった。砂糖は一粒も入れていない。僕はブラック派だ。

「一本良い？」中尉が桃杷田に訊いた。

「ええ。構いませんよ」桃杷田は鼻の頭を掻きながら答えた。「少し湿気ってますが……」

「構わないよ」

中尉は桃杷田から煙草を受け取り、彼のマッチで火を点け、啜えた。普通、中尉はいつも、煙草と火種を欠かさず所持している。どうしたのだろう、他人から借りるなんて。僕は黙ったまま、中尉を観察する。注意深く見ると、彼女の顔色はどこか青白かった。疲れているのだろうか。シャワーは既に浴びてきたようだ。黒い髪の毛がまだ湿っているし、石鹸の匂いが漂っている。

「歩瀬、後で少し良い？」彼女は僕の顔を見て言った。別に、僕の視線に気付いた訳ではなさそうだ。僕は吐息を吐いた。

「何です？」

「今から一時間後に、私の部屋に。個人的な用がある」

僕はまたコーヒーを口に含み、すぐに飲み込む。「それは命令ですか？」

「いや。残念ながら、勝手なお願いだよ」

「分かりました」僕は頷いた。それから、石像のように口を紡いでいる二人を見る。「桃杷田、石畝、そういうことだから。今日のポーカーは、パス」

「すまないな」

中尉は煙と一緒に言葉を吐き出した。

「いえいえ。こんな友人で良いなら、幾らでも貸して差し上げますよ」石畝がおどけた調子で言う。

僕は彼を睨む。いつから僕はお前の所有物になったんだ。次のポーカーでは絶対に大枚を叩かせてやろう。ちなみに、僕はポーカー

が弱い。けれど、石畝はいやらしい程運が良いだけで、桃杷田みたいな頭腦的な駆け引きは出来ない。僕だって、運が憑けば、石畝くらいになら負けることはない。

「……、じゃあ、私はもう下がるから」

「はい。お疲れ様です」桃杷田が静かな口調で言った。

「では、一時間後に」僕は上唇を舐めながら、席を立つ中尉を見上げた。「何か持っていきましようか？」

「ああ……、いや」中尉はかがんで煙草を挟んだ手を灰皿に伸ばした。「別に、何も必要ないよ」

明日が休養だというから、酒の誘いかと思ったけれど、どうやらそういう誘いではないらしい。きっと、数分程度話をするだけだろう。一時間後と指定したのは、彼女が僕を氣遣ってくれているということだ。僕は今、一応、食事中だった。

中尉はおもむろに席を離れ、食堂を後にした。僕はその背中を見送った後、コーヒーの残りを全部喉に流し込んで、空咳をした。「何の用事だろう」

「さあな」石畝は口元を曲げて、視線をスープに落としていた。「あーあ、せっかくの良いカモが」

「俺達に分かる訳がないだろう。きっと、歩瀨達の世界の話だろうし」桃杷田も肩を竦めた。

「それよりも……、なあ、歩瀨」石畝は明るい表情を作る。「今日はどうだった？ どんな具合だった？」

「どうって、何が？」

「だから、三間坂隊長との訓練だよ」

「どうもしないさ。いつも通りだよ」

もう嫌というほど聞かれた質問だ。僕はそのたびごと、いつも同じ答えを返しているというのに。

「いつも通り、か。じゃあ、今日も銃を取ることはなかったんだな……、彼女」

「もうお目にかかれないのか……。かの英雄の、腕前……」桃杷田

は低い声で言った。

「それは、本当に残念だ」僕は深く頷いた。

「二人だけだからって、何か特別なレクチャーだってないんだろう？」石畝が訊く。

「集団の前で言っていること以外のことは、殆ど何も聞かないよ」

「歩瀬くらの奴になら……とか、思うんだがな……」

桃杷田は首を傾げて、また煙草を取り出した。そしてゆっくりと火を点け、ゆっくりと煙を吐く。僕にはそれが、火山の噴煙のように見えた。

「天才は誰にだって平等さ。いつでも。ただ、色々と区別はするけれど」

僕は腕を天井に向け軽く伸びをした。どこかの関節が、木の枝が折れるような軽い音を鳴らした。

「そういうものなんだろうな、やっぱり。ああ……、継承とか、きつと、くだらないんだろうな……」石畝は溜息を吐く。

中尉——三間坂希和は、確かに、英雄と呼べるだけの存在だった。若くして、陸軍の最底辺から、現在の『南方部特務師団所属第三歩兵隊小隊長』という地位にまで上り詰めた。その大きな理由として、敵国本土戦での活躍がある。彼女は人並み外れた体力と知力を認められ、即行戦力として、戦地へと召集された。勿論、ただの歩兵として。しかし、彼女は、ただの歩兵以上の功績を上げた。たった数名の小隊の中で、普通の何倍もの人数の敵兵士を殺傷したのである。正式記録によれば、その初陣で、敵歩兵六八人を殺傷している。内、五〇人が死亡だったという。一人倒すのに、平均二発しか弾を撃っていないという逸話もある。当然、使用銃器は、一般的に支給されるアサルトライフルだ。

しかし、同戦で彼女は左頭部に敵の弾丸を受け、重傷を負う。これが原因で、彼女の左目は失明した。それでも彼女は、自分は大丈夫だと主張し、戦い続け、ハンデを背負いながらも、二〇数名余りの敵兵士を殺傷している。

彼女は抜きん出た能力を持った兵士だった。それは、主に、強靱な精神力と、精密度な射撃技術のおかげだろう。弾丸が身体を掠めても止まらず、正確に的に銃弾を浴びせながら、進んだらしい。白兵戦において、彼女の右に出る者はいなかった。彼女の半径二メートルにいた味方は口を揃えて、「自分たちの存命はこれで保障されたようなものだ」と言っただろう。それほど、彼女の能力は信頼されていたことになる。

彼女が敵国本土戦から離脱したのは、彼女の存在力を上手く使用したいという、上層部の企てがあったからだ。彼女は南方部特務師団所属第三歩兵隊小隊長という地位を与えられ、敵国本土とは程遠い、南方の敵国領のイーリアで、キャリアづくりに励むこととなった。本土でもそれは出来るが、殆ど制圧が済み無害に近くなったイーリアの方が、彼女の命が安全だからだ。これは僕の個人的な妄想だけど、彼女はそのときから、軍の宣伝玩具に仕立てられ始めていたのだろうと思う。

「イーリアに連れて行かれると聞かされたときは、あるいは……、と期待してたけど。俺達がここに来たときは、殆ど湿気っていて、戦鬨らしき戦闘は皆無だったからな」石畝がスープを完食した。皿には、何粒かコーンが残っていた。「熱心に教えたくても、その機会がない、と言えば、ないな」

確かに、少人数グループでの演習と、実戦とでは、一八〇度話が違ふ。

「僕だって、恵まれている方だと自覚はしているさ」

この小隊で、いや、この駐屯地で、中尉に一番近いところにいるのは僕だ。それは、紛れもない事実。

「レクチャーの呼び出しだったら良いな」桃杷田が言う。

「だったら僕も嬉しいよ」

僕はカップの底を見つめていた。純白だったカップは、コーヒーの染みで汚れている。けれど、心地よい香りがした。桃杷田が煙草を愛しているように、あるいは石畝がポーカーを愛しているように、

僕はコーヒーを愛していた。

「でも、きつと、違っただろうね」

たった今になって、やっと、もう中尉の前で銃を構えることはなくなるんだ、という真実が、胸の奥辺りで暴れ始めた。

錆錆

十

桃杷田、石畝と別れた後、自分の部屋に戻り、約束の時間まで、ぼうつとして過ごした。ベッドに寝転がって、白熱灯がぶら下がった天井を眺めていた。光に集る二、三匹の羽虫が、偵察機みたいな怪しげな軌道で飛んでいるのを、何の意向もなく、ただ観察していた。僕は、非生産的な行動を嫌悪しない。

同室の伊谷京香^{イタニキョウカ}は、どこかへ出払っていた。彼女は非常に忠実^{まめ}やかな性格なので、多分、室内競技場でトレーニングでもしているのだろう。

約束の五分前には部屋を出て、別棟の二階にある中尉の部屋へ出発した。ちゃんと屋根の付いた連絡路があるので、雨の心配はなかった。ただ、少し肌寒かったので、空軍関係者からの貰い物の、僕の身体には大きめのフライトジャケットを羽織って出た。消灯時間まで余裕はあったので、ゆっくりと歩いた。

階段を上りきって廊下へ出たとき、つきあたりの中尉の部屋から出てくる男の影があった。彼は俯いて早歩きをしていたが、僕の存在に気が付くとはっと顔を上げ、歩く速度を落とした。

「……ああ、なんだ、君か」

「副司令官」

僕は立ち止り、軽く敬礼をする。

「いや、そんな態度はよしてくれ。今はプライベートだろう」

南方部の副司令官が何故こんな場所にいるのか、何故中尉の部屋から出てきたのか。僕は疑問を感じたけれど、訝しげな態度は取らないで、平素な対応を心掛けた。

「どうして、ここへ？」

「その、三間坂君に少し話があつてね」瀬戸島副司令官は、僕から目を逸らしながら小さな声を出した。「……、なに、昇級の話さ」僕は納得したように頷くふりをし、愛想笑いを浮かべる。「お勤め、御苦労様です」

「ああ……。君は、彼女に何か用があるのか？」

「ええ。呼び出しをくれました」

「そうか……。大変だな、君も……。出来るだけ、早く休むように。本国へ帰れば、暫く身体を動かせない期間が続くからな」

瀬十島副司令官は鼻元の髭を撫でつけながら、歩行を再開した。階段を下りていく彼の大きな背中を見送ってから、僕は中尉の部屋のドアまで進んだ。

「中尉、来ました。歩瀬です」三回ノックを鳴らし、大きな声を出す。

「良いよ。入って」

中から声が返ってくる。

「失礼します」

クリーム色のドアを開けて、部屋の中に足を踏み入れた。煙草の匂いが鼻を^{くすぐ}った。中尉は丁度、ドアの対面の窓際に立ち、外を眺めながら煙草を吸っている。開け放たれた窓からは、フライパンで炙られるハムのような虫の鳴き声が入ってきていた。

部屋といっても、ここは執務室みたいなものだ。金属製のワーキングデスクと、武骨なデザインの椅子、本棚、長細いテーブルと応接ソファ、それと重々しい楯とトロフィーが飾られてあるだけ。彼女が寝泊まりしている部屋は別にある。

「中々、止まないな」中尉は外に顔を向けたまま言った。

「そうですね。この調子だと、明日もずっと雨でしょうね」

雨は神様の涙だというジョークがあるけれど、僕にはそれが全然面白くなかった。僕にとって、雨は、単なる水滴。世界の至るところから集まった、不純物の塊でしかない。あれに感動できる人間の感性は、どうかしていると思う。確かに、灰色の空は綺麗だけど。

「……、副司令官と鉢合わせしました」僕はソファの傍へと歩きながら言った。

「そう。……ああ、適当にかけて」中尉は窓を閉めると煙草に口を付けた。「私の司令部入りが確定しそうだ。近々、ここにいる内に、正式な伝達がある」

「おめでとうございます」

僕は安物っぽい革張りのソファに、お尻を沈めながら言う。

「銃は、もう、握れないだろう……」

中尉は眼帯を触った。何を名残惜しんでいるのだろう。いや、名残惜しむべきものはたくさんあるだろう。けれど、僕が彼女について知っていることなど、高が知れている。きっと、彼女にしか分かり得ない思い出だってあるのだ。

「それは、残念です……」僕は下唇を軽く噛んだ。「戦っていない、中尉なんて……」

「らしくないか？」

僕はその問いに答えられなかった。僕にとっての三間坂希和と、彼女にとっての三間坂希和のイメージには、ギャップがある。そのギャップの差は海溝よりもずっと深い。

「話というのは……、なんですか？」

僕は小さな吐息と一緒に、言葉を吐いた。

「君の今後の展望について」

「自分の、ですか？」

「そう……。少し、世話を焼きたくなってな」僕が座っているソファの後ろ側に、中尉は立つ。背向きだ。中尉の背中がすぐ真後ろにある。僕は少し緊張した。

「……聞きます、話」僕は顎を引いて、頷いた。

「歩瀬、君は私を追いかけたいか？」

「はい」

「どこまでも？」

外で雨が、屋根や、近くのヤシに落ちる音。リズム感は、全くバ

ラバラ。この音でダンスを踊るのは至難の業だろう。いや、虫達は、このリズムに泣き声を合わせられているのだ。とても、不思議だ。音痴の僕には到底理解が出来ない音響だった。

「はい……」

僕と中尉を取り巻いている時間の流れが、静止する。

あるのは、外のナチュラルな音響だけ。

長い長い、

凍土の世界のような、沈黙。

気配のない。

匂いは、あった。

ライフルの薬莢のそのような、煙草の匂い。

中尉の、匂いだ。

「そう」

中尉が煙草の煙を吐き出した。

「僕の心境が分かりませんか……」僕はまるで一人言のように呟いていた。

「いや、分からないことはないよ。今の歩瀨なら、そう言うと思った」

優しい口調だった。小さな子供を相手にするような。いや、僕は彼女にとっては、小さな子供でしかないのかもしれない。世間知らずで、尻の青い。大人になりきれない、永久の子供。

けれど中尉にだって、きっと、分からないことはある。

「君は、私になりたい？」

「いえ……、そうではなくて……」僕は手を組み、指を弄びながら言う。「僕は、貴女に近づきたい……。限りなく、近づきたい……。貴女を、解りたい。」

けれど、そんなことは不可能だ。

近づくと言っても、限界はある。人と人は、決して交われない。これは物理的な問題ではなくて――、分子レベルの問題ではなくて。そう。精神の問題。ただ接近するだけなら、簡単だ。握手でも交わ

せばいい。それで交わった気になっている奴は、お気楽だ。ずっと、そうしていればいい……。

しかし、真実、決して解り合うことはないのだ。人は他人を解れない。それが出来れば、今僕は、兵士として、こういう形で、中尉と顔を合わることなんてなかった。それに、そもそも、戦争だって起こっていない。

規模は違うが、宇宙の構造を人類が未だに解り切れないのと一緒に。宇宙は怖い。解らないから。そう、だから、他人という存在は怖い。解らないから……。

怖いから、自然と溝は生まれ、やがて嫌悪という感情が生まれる。対立する。争いが発生する。

けれど、僕は……、

僕は、中尉を解りたい。

僕にとって、中尉だけが、怖くない……、信じられる存在だ。両親よりも、何よりも。

しかし、それはきっと……、夢幻のような願望なのだろう。

それこそ、雲を掴むような……、

けれど。

「私は君に目標とされるような、立派な人間ではない」

「どうして？」

僕は敬語を忘れ、少し乱暴な口調で訊いてしまった。

「私は汚れている。もう……、君のように、純粋な気持ちで銃を構えることは、なくなってしまった」

「人を殺すのに、純粋も何も、あるのですか？」

殺人を正当化するつもりではないのだろうが、僕にはそういうニユアンスに聞こえてしまった。

「あるさ」中尉のブーツの音が鳴った。多分、片方の足の踵を上げたのだろう。中尉が直立するときは、その姿勢でいることが多い。

「どういう、気持ちなんですか。それは」

「他人の命を奪ってまで生きようとする気持ちは、とても人間的で

いて、とても綺麗だよ」

「何となく、理解は出来ます……」僕は結んだ手を解いた。「それが、今の中尉には欠けていると？」

「そういうこと。私は、もう、疲れた人間なんだ。思った以上に、こちら側の世界は疲れる……。本当に……」中尉は溜息を混じらせ、トーンを落とし気味に言う。「君には、こういう思いをして欲しくない」

「中尉……」

「こちらに近づけば、君も汚れてしまう」

汚れる。汚れる……、

そればかり。

一体、中尉は何が言いたいんだろう。

僕には、分からない。

「私になろうとは、考えるな」

「そういう訳ではないと、言いましたが……」僕は床を見つめていた。木目がとても荒い床板だった。火を付けたら、どれくらい綺麗に燃えるだろうか。

「本当に、そう？ 君は私の背中を見つめている。私にはそうしか思えない」

「僕は別に貴女の真似がしたいんじゃない！」

僕は叫んだ。

中尉の呼吸が、三秒ほど止まる。

「僕は……、貴女の真似がしたいんじゃない……。貴女の、傍に居られれば、それだけで良い……。それだけで……。僕は、僕は……。そのために、たったそれだけのために……。別にしたくもない人殺しを、全うしてきたんだ……。それが、貴女に近づくために、必要だったから」僕は眉を顰め、涙を堪えていた。「近づきたい。貴女に……。誰よりも、近くに……。限りなく、0センチ近くまで……」

「近づいて、どうする？ 近づいて、誰よりも、私の近くに立つことが出来て、それが何になる？」

中尉の声は乾いていた。

「……、僕は……、僕は……」
言葉が出ない。

「もう良い。もう良いよ、歩瀬……。どちらにせよ、君は、私の背中ばかり見つめているんだ。私を幻だと思えないのなら、一緒だよ。今の君は、すごく感情的だ」
違う。

僕は貴女になりたいんじゃない。そうじゃないんだって、言っているのに。どうして中尉には、それが分からない。どうして僕を、解ろうとしてくれない。

「君には、本当に……、私のような人間にはなって欲しくないんだ……」中尉は声を押し殺した。「私は、私より外の世界……、世間から舐められたくなかった。この世は、舐められた奴が敗北者なんだ。だから、その一心で、ここまで這い上がってきた。私は強い人間なんだ、って、それを周りに知らしめたかった。けれど、這い上がった私は、ものすごく汚い人間だった。どこもかしこも、汚れている。そう……。強いんじゃない。その汚れに気がつくのが遅過ぎただけだった……。ただ、鈍感なだけだったんだ。強さだけに、囚われていたんだ、私は……」

ずるい、と思った。そんな突き離し方は、とてもずるい。急に弱いところを見せつけて……。僕は、どうすれば良い……。

「君には汚れて欲しくない」

「僕は」

だって、そんな……。僕だってもう既に、汚れている。中尉が汚れているなら、僕だって……。

だって、銃に染みついた錆は、幾ら丁寧に拭いたって取れないんだ。

霖雨

十

休養日といってもすることはない。特に、今日は雨が降っている。ラグビーだって、バスケットボールだって、フットボールだって、出来やしない。少々の雨なら、出来ないことはないかもしれないけれど、グラウンドも芝生も、水分を含み過ぎて、普通に歩くのだってままならない。室内競技場が使用出来たが、普通、球技には使わない。筋力トレーニングが主だ。よって、することと言えば、読書とか、音楽鑑賞とか、インドアな趣味。その程度。

僕は例のごとく、ベッドに寝転がっていた。

昼間だというのに、暗雲が空に立ち込めているせいで、部屋はダウンタウンの裏路地みたいに暗かった。伊谷が遅い朝食から返ってくると、彼女はすぐさま明りを点け、僕に、「何の修行をしているの？」と苦笑交じりに訊いた。

「伊谷は三間坂隊長のことをどう思っているの？」

僕は、唐突にそんな質問を彼女に投げてみた。

「希和さんのこと？」

伊谷を含め、多くの女性兵士は中尉のことを「希和さん」と呼ぶ。別に、馴れ馴れしいとは思わない。どう呼ぼうと、それは、他人の自由だ。けれど、中尉のことを中尉と呼ぶのは、ここでは僕くらいだった。

「近いけど、遠いね」

「ああ……。なるほど」僕は上半身を起こしながら言った。

「歩瀬は？」

彼女は首に巻いたタオルで顔を拭きながら訊いた。シャワーも浴

びてきたらしい。茶色の髪の毛は濡れ、彼女特有の小麦色の肌は瑞々しかった。

「伊谷と、だいたい一緒」

「歩瀬でさえ、そんな感想なんだ。やっぱり、すごいんだな……、あの女^{ひと}」

伊谷は片側のベッドに腰を付けた。やっぱり、彼女の腰と太ももは細すぎる。だから、要所で粘れないんだ。身体が小さな僕が言えた話ではないのだけど、彼女には、狙ってそんな体形を維持しているきらいがあるような気がしてならなかった。

「歩瀬、朝食は？」

「今日は要らない」

僕はそう答えながら、膝を抱えて、マニュアルみたいな体操座りをした。

昨日のことを思い出していた。

けれど、それは、まるで煙草の煙みたいに、空気に静かに溶けていくような感じで、僕の思考の中から消えていった。

雨はまだ、止みそうにない。

現実

十

訓練最終日は、雨の中でのものとなった。しかし、やることは全く変わらない。林地へと出向き、すっかり虫の息のような勢力のイーリア人ゲリラ兵を相手にする。それだけだ。全く、非生産的な訓練だと思う。特に経験値はない。原始人を相手にしているようだと言っても、大げさではないのだ。装備が、各段に違う。ゲリラ兵は、二〇年前のこちらの軍の装備で、やっと対等かどうかといったレベルの装備だった。

中尉は体調不良らしく、僕のペアは中尉より年上の女教官となった。僕は、何の疑問も発言することなく、教官に従い、ゲリラの駆逐を全うした。

二人、殺した。

彼らは僕よりも若そうなゲリラ兵だった。二人とも、動きが全然素人だった。照準を合わせることすらおぼつかなかったのだ。多分、手榴弾すらまともに投げられないのだろう。

五秒。

それが、彼らが僕に出会い、彼らが死に倒れるまでの時間だった。彼らは、いわゆる、チャイルド・ソルジャーというやつだったのだろう。けれど、子供でも、大人でも、老人でも、僕には関係ない。たまたま、僕に奪われる運命にあった命だ。ありふれた、命。僕もそれと同じものを持っている。

教官の手を借りるまでもなかった。

この愛銃は、僕に、とても懐いている。

呼吸をするように……、安易に、人の命を奪うことが出来る。

震動。覚悟。戦慄。後悔。

何もない。

いや、なくていい。

呼吸。

タイミング。

呼吸。

僕は、それに合わせて、人を殺す。

後、何人殺せば、僕は中尉の背中に触れることができる？

乖離

十

雨が止んでいた。

訓練先の林地から駐屯地へと帰ったときには既に午後だった。雲はまばらに散り、その隙間から白色の陽光が漏れていた。神様が潜んでいそうな空だった。

石畝と桃杷田は、浮き立つようにジープから降りて、すぐに僕の視界から消えた。三間坂早く来いよ、と言っていたような気がする。ああ。そうだ。ポーカード。僕が唯一心を開いた遊び。彼らなりの気遣いだったのだろう。今日で訓練は最後だったし、もしかしたら、酒でも一杯くらいやりたいのかもしれない。命があることに、乾杯。僕は、ゆつくりと寮棟を目指して歩いた。雨で濡れた身体を、いち早く、シャワーで温めたかった。

「歩瀬……、ちょっと……」

寮棟と本棟の間の、庭園染みた空間に差し掛かったときだった。誰かから手を引かれた。僕はゆつくりと振り返った。そこには、濡れ鼠になった中尉がいた。プールで泳いだ後みたいに、髪はへたれ、瞳は窄みかけていた。

「中尉？ どうしたんです？」

「来て……」

中尉は僕をどこかへ連れて行こうとしていた。僕は黙って頷き、彼女の右手に引かれるがまま、足を進める。

本棟に向かっていた。

何の要件かは、さっぱり分からない。ただ、異常であることは、間違いない。こんな中尉の姿は、今まで見たことがない。

「ここなら、良い」

本棟の一階。普段何に使われているのか分からないような部屋のドアの前で、中尉は止まった。

「どういうことですか？」僕は訊いた。

けれど、彼女は答えず、折の中に捕らわれた爬虫類のように沈黙したまま、ドアを開け、中へ入った。僕も中へ入る。ドアをくぐった瞬間、黴の臭いが鼻を刺した。ブルーチーズのような気品は一切ない。ただの、黴だ。

窓以外、何もない正方形の部屋だった。

いや、窓の下に、比較的新しそうなダブルのベッドがあった。誰が泊まる部屋だろう。人間が泊まる部屋にしては汚れ過ぎている。

「考えたんだ、私」中尉はおもむろに、部屋の中央まで歩いた。それは、まるで、演劇のような歩みだった。

「何を……、です？」

「君が、どうしたら、汚れることなく、進んで行けるか」

中尉はジャケットの裏に手を運んだ。何かを取り出している。

「中尉？」

それは、拳銃だった。黒い拳銃。まだ、真新しそうな……。命を奪ったことのなさそうな、純朴な拳銃。

「こうする」

中尉は、その銃口を、自らのこめかみへとあてがった。

「中尉？」

僕は呼吸の仕方を忘れていた。

ここは、水中だっただろうか。

「私は、弱い人間だ」中尉は言った。

声に、水分が感じられない。

この部屋の空気は、乾き過ぎだ。外は雨だというのに。湿潤しているというのに。この部屋は、ただ冷たいだけで、潤いが一切ない。

「こうすれば、君は、汚れない。永久に」

中尉は、一体何を言っているんだろう。

何をしているんだろう。

僕には、分からない。

分からない。

「私はずっと幻影のまま」中尉の右目からは涙がこぼれていた。「後は追い越すだけだ……」

「何をするつもりですか？」

やっと出た言葉だった。僕の声はかすれていた。一年位、喋ることを忘れた人のような……、空気にそっと溶けだしてしまいそうな小さな声だった。

「死ぬつもり」中尉の唇が小さく動く。「君の目の前で」

死ぬ。

死ぬ、ってなんだ。

それは、つまり、僕の目の前から消えるということ？

いや、死んでも、消えない。中尉の身体が、幽霊のように透けていくという訳ではない。死体が残る。かつて、中尉だった死体。中尉だった、物質。魂の、残滓^{ざんし}。

消えるのは、中尉の命。

そう。

今日、僕に命を奪われた彼らのように。

消えるのは、中尉の命。

僕もそれと同じものを持っている。全く、同じものを。

「どうして？」

「私より外の世界は……、私を汚した。次は、君を汚そうとしている」中尉は疲れたように、首を傾けていた。「そんなことは、許さない。絶対に」

「どうして……？」

訊きながら、僕は、護身用の拳銃を腰のガンホルダーから抜いていた。軽い。こんなものでも、銃と呼べるのだ。この銃は、銃口が細い。引き金とシアーも全く噛み合っていない。設計者は、多分、徹夜で手抜きをせざるを負えなかったのだろう。

それでも命を奪うのには十分だ。

「何をする？」中尉が訊いた。

僕は、何も言わない。

時間の流れが遅い。

宇宙的だ。

それでいて、現実的。

僕は、静かに、銃を構え、中尉の瞳に向けた。

温かい。

僕の頬にも涙が伝っている。

これなら、大丈夫だ。

手が震えることはなかった。

不思議だ……。

温かい。

大丈夫。

何も、怖くない。

何も……。

「ああ……、歩瀬……」

中尉は頷いた。

けれど、それは、とても幸せそうな表情だった。彼女が産まれてきたとき、彼女の両親はそういう顔をしていたことだろう。

僕も、頑張って、彼女の表情を真似てみる。

彼女は笑っていた。

それから、

「さようなら」

と、彼女は瑞々しい唇を動かして、呟いた。銃をこめかみにあてがったまま。

「さようなら」

僕も、最期の挨拶をする。

これが、最後だ。

永久の、別れ。

さようなら。

僕の、幻。

さようなら……。

それは、

僕が初めて、中尉を、三間坂希和という人間を、認めた瞬間だった。

乾いた小さな破裂音が、狭い部屋の中で静かに響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6293q/>

彼女の外と僕の中

2011年2月4日01時03分発行